

キリストの仮面をかぶって

奨励	大賀 幸一〔おおが・こういち〕
奨励者紹介	日本キリスト教団京都丸太町教会牧師

エフェソにある教会の天使にこう書き送れ。『右の手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が、次のように言われる。「わたしは、あなたの行いと労苦と忍耐を知っており、また、あなたが悪者どもに我慢できず、自ら使徒と称して実はそうでない者どもを調べ、彼らのうそを見抜いたことも知っている。あなたはよく忍耐して、わたしの名のために我慢し、疲れ果てることがなかった。しかし、あなたに言うべきことがある。あなたは初めのころの愛から離れてしまった。だから、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて初めのころの行いに立ち戻れ。もし悔い改めなければ、わたしはあなたのところへ行って、あなたの燭台をその場所から取りのけてしまおう。

(ヨハネの黙示録 2章1―5節)

福島県の東日本大震災、福島原発事故による「帰還困難区域」は、大熊町、双葉町、富岡町、浪江町、葛尾村、飯館村そして南相馬市の一部などを合わせておよそ600㎞ほどになります。再び日本人と日本政府は、人が住めない地域を生み出してしまいました。実はおよそ100年前、日本人は毒のために人の住めない地域を生み出していたのです。1906年、栃木県の旧谷中村を含む33㎞です。福島の面積の18分の1ですが、すでにそこに住んでいた人々を強制的に追い出し、そこに渡良瀬遊水地を作りだしたのです。これがいわゆる足尾鉾毒事件です。

足尾鉾毒事件

1877（明治10）年ごろ、渡良瀬川上流の足尾銅山から流れてくる鉾毒によって、農業・漁業被害、山林被害が次第に深刻になってきました。1887（明治20）年ごろ、足尾銅山の採掘量が増大し、鉾毒被害もさらに増加していきました。農産物の立ち枯れ、鮎など魚の大量死、山林の立ち枯れなどです。原因は足尾銅山であることは明白で、度々起こる河川の氾濫で、鉾毒被害は北関東から南関東へも及んだとされています。足尾銅山を開発した古河鉾業や日本政府に対応を求めて住民運動が盛んになっていきます。住民運動を担った一人が、栃木県選出衆議院議員、田中正造さんです。彼は当時の日本帝国議会でも鉾毒被害を訴えましたが、日本政府はなんら対策を行いませんでした。1900（明治33）年、日本政府に直接鉾毒被害を訴えようとした地元住民たちが、暴徒として逮捕されるという川俣事件が起こります。たくさんの地元住民が逮捕され、裁判にかけられています。1901（明治34）年、田中正造の明治天皇への直訴がなされますが、失敗します。しかし逆に、日本国中に足尾鉾毒事件が知れ渡ることになり、注目を得ます。日本政府もようやく調査を始めますが、足尾銅山の鉾毒が原因であることを認めることはありませんでした。あくまでも洪水対策として遊水地が作られることになり、谷中村は買収され、移住させられます。最後まで移住に反対した人たちも日本政府によって強制的に排除されました。名目は洪水対策の遊水地ですが、鉾毒を沈殿させる遊水池は、100年経ってもまだ鉾毒が存在していることが確認されています。

田中正造と永島與八

田中正造は、足尾鉾毒事件以前からキリスト教を知っていて、聖書を読んでいます。鉾毒事件以降は、キリスト教会でも鉾毒被害対策を訴え続けています。そんな田中正造が死んだ時に持っていた袋に入っていたのは、帝国憲法と石ころ、そして新約聖書でした。田中は後に佐野キリスト教会となる集会でキリスト教に触れています。田中と共に鉾毒事件を戦った多くのキリスト者たちがありました。その一人が永島與八です。永島は1900年の川俣事件で逮捕された70名ほどの人々のなかの一人で、前橋刑務所に収監されます。当時の前橋キリスト教会の堀貞一牧師たちは、川俣事件逮捕者たちをよく世話したそうです。永島は結果的に控訴棄却となり解放されます。そして前橋教会で洗礼を受けています。一緒に洗礼を受けたのが永島たちの裁判を行った判事、磯部衛でした。ところが田中は、永島が洗礼を受けキリスト教徒となったことを喜ばず、逆に裏切り者として非難しました。工藤英一さんが書かれた「田中正造周辺のキリスト教徒」という一文の中で、田中が当時のキリスト教をどう見ていたかが書かれています。「鉾毒被害民の救済こそ神の道と信じる田中からすれば、教会は個人の救いのみを求め、しかも救われることのみを求めて、救うことを考えぬ、きわめて利己的なものと断ざるを得ないのである。その限りにおいて、教会の姿勢は、きわめて抽象的であり、田中からみれば、非行動的、偽善的なものと思われた」とあります。キリスト教会の側も、川俣事件以降、あんなに積極的に鉾毒被害対策を訴え、協力的であったキリスト者たちが蜘蛛の子を散らすように引いていきました。植村正久も田中の聖書理解と社会活動を批判しています。永島與八は、自ら記した著書『足尾鉾毒事件と田中正造翁』の中で、洗礼を受け、聖書研究や教会活動に力を入れて、鉾毒事件にかかわらなくなったことが田中の批判を受けたと判断しています。しかし実際には、永島の父が鉾毒事件にかかわるなど求めたということです。田中はそのようなキリスト者たちを、「キリストの仮面の輩」と呼んで、真のキリスト者ではないとしていたようです。田中と永島は2年後には仲直りをし、永島は鉾毒事件にかかわり続けます。永島は同志社大学神学部で学び、後に救世軍に入ったりしますが、栃木県の佐野教会牧師となり、アメリカとの戦争を危惧してアメリカを講演して回ったりもします。1944年、71歳で逝去します。キリストの仮面の輩と批判を受けながら、それでも鉾毒事件で土地や家を奪われた人々に寄り添い、共に生きようとしたキリスト者がいたことを覚えていただきました。